職員History④　～勤続25年を超えた職員編（令和5年度 岡崎賞受賞職員）～

びわこ学園では勤続25年を迎えた職員に対し、永年勤続賞としてびわこ学園の発展に生涯をかけ尽力された初代園長岡崎英彦先生の遺徳を記念した「岡崎賞」を贈呈しています。
ここでは、本年度岡崎賞を受賞した職員の投稿をお届けします。

私は忘れられないことがあります。新人研修が終わり、病棟に入り2日目の事です。夕食介助後、利用者さんが笑顔で何かを、何度も仰っているのですが、全く聞き取れませんでした。先輩職員に声をかけ、一緒に聞き取ってもらうと「気を付けて帰って下さいよー」との言葉でした。

初めての病棟に緊張しまくっていた事、下手くそな介助に付き合ってもらった事、なのにそのような気遣いを頂いた事、聞き取れない私に諦めずしかも笑顔で何度も伝えて下さった事などなど、申し訳なさがあふれ、同時にその利用者さんの光のような優しい言葉に救われました。

利用者さんのここでの暮らしが少しでも光輝くものであるように。あの時利用者さんからもらった言葉のように、いつか私も、利用者さんにちいさくても光を届けることができるように、これからも支援していきたいと思います。

（吉田かおり・生活支援課長・26年目）
びわこ学園医療福祉センター草津

この度はこのような賞をいただき、本当にありがとうございます。あっという間の25年、いつの間にか時間が経っていたというのが本当のところです。

この25年、多くのことを経験し、学ぶことができました。時には笑い、時には悩みながら過ごしてきたことが今の自分の糧となっています。

多くの人達に支えられ、ここまでやってこれたことに感謝します。今後も自分自身を磨きながら、小さな実績を積み上げていければと考えています。

本当にありがとうございました。

（小林　晃・ヘルパー・26年目・サービス提供責任者）
びわこ学園障害者支援センター
・ヘルプステーションちょこれーと。

その昔、通所に異動したばかりの私と、まだ知り合って間もない利用者とボランティアさんと3人で、全障研（全国障害者問題研究会）の北海道大会に行ったことがあります。

旅の初日、北海道に無事に着いたとホッとしたものの体力的にはしんどかったのでしょう、外食する気力は残っておらず1日目の夕飯はカップラーメン（！）になってしまいました。

翌日は全障研で発表をし、滋賀に帰って来た時の満足そうな笑顔を見た時に、大変だったけど行けて良かったと思いました。見知らぬ者同士で「全障研で発表するため北海道へ行く」と決断した彼女は、チャレンジャーだと当時思いましたが、それだけ強く願っていたという事です。「やりたいことをする」という当たり前の願いが誰しもあり、それを言葉にできない利用者さんもおられます。そんな利用者さんの願いや思いを自分はどれだけ汲み取れているのかな…、と思いながら今もこの仕事をしています。

今の目標は、利用者も、一緒に支援する職員も、「楽しい・心地良い」と感じられる活動のお手伝いをすることです。

（中能かおり・生活支援員・26年目・活動担当）
びわこ学園医療福祉センター草津